Case 27-2006: A 17-Year-Old Boy with Fever and Lesions in the Liver and Spleen
(New England Journal of Medicine 2006;355:941-8.)

#1.発熱・盗汗

入院２ヵ月半前より盗汗、６週間前から戦慄を伴う発熱を認めている。Spiking fever であり、最高体温は40.2℃。白血球増多や左方移動は伴わない。

#1-1.赤沈亢進

入院6週前の採血では ESR 44mm/hr、入院5週間前では ESR 50 mm/hr、と赤沈亢進が認められる。

#2.肝臓・脾臓の腫瘤

入院 2 週間半前に他院で撮影された CT および MGH 入院時に撮影された造影 CT にて、肝臓および脾臓に多数の低吸収域の腫瘤が認められた。病変の辺縁は enhance される。腫瘤の直径は 1cm 以下～3cm である。

#2-1.肝腫大

入院４、５週間前に行われた腹部超音波検査にて肝腫大が認められており、入院時肝臓が 1cm 触知された。

#2-2.腹部リンパ節腫脹

入院時の腹部 CT にて門脈・膵臓・大動脈周囲のリンパ節腫脹が認められた。

#2-3.LDH 高値

入院４日前の採血では、LDH 333U/L であり、入院時も 252U/L と上昇している。

#3.体重減少

入院 5 週間半前に 64.9kg であった体重が、入院時 61.4kg と減少している。

#4.貧血

入院時 Hb 10.7g/dl と貧血を認めた。

#5.尿路感染症

入院4週間前に混濁尿が認められ、尿培養で cefepime 感受性、fosfomycin 中間感受性の enterobactor が認められ、他院にて cefepime と fosfomycin の治療を受けた。入院 1 週間半前の尿培養は陰性で、WBC 2-4 個/HPF であった。

#6.咳嗽・咽頭発赤

入院 4 週間前より、乾性咳嗽を認めている。痰はない。入院時咽頭発赤、扁桃腺腫脹も認めた。

#7. 鼠径部リンパ節触知

入院時左鼠径部にリンパ節が触知されたが、この年齢の男性では正常範囲内と考えてもよいと思われる。

（リンパ節の大きさなどの詳細は、原文に書かれていませんでした。）